

論文内容要旨

1、論文の目的

本論文は、近年の「性別越境」（二元論的性別観から逸脱すること）に関連する様々な社会的現象（自身の性別に違和感を覚える人々の自己像、かれらを取り巻く医療言説、当事者団体、当事者言説、家族等）の変化を考察することで、近代的なジェンダー概念や自己像が、今日どのような変化を迎えているかを明らかにすることを、目的としている。

先述した諸現象を分析しつつ筆者はまず、近年において「性別越境」を取り巻く社会的環境が大きく変化していることを、明らかにする。1990年代、医療界で「性同一性障害」概念が疾病概念として登場するまで、「性別越境」は、サブカルチャーあるいは個人的秘密の中にしか存在しえなかったが、1990年以降、医療世界を中心に「性別越境」に対する社会的受容がなされるようになり、大きく状況が変化した。

筆者は、この状況変化が、当事者の自己像にも変化を生じさせていると主張する。すなわち、「性別越境」に対する社会的規範の寛容性が乏しかった時には、多くの当事者が、「男性から女性へ」「女性から男性へ」というように、二元論的ジェンダー観に基づいて「別の性別」を自己像とすること（それゆえ性別転換を望むこと）を主張していた。筆者はこのような二元論的ジェンダー観に基づく自己像を、近代的ジェンダー観に基づく自己像と規定する。けれども「性別越境」に関する社会規範は、「性同一性障害」に対する社会的認識の普及によって次第に変化し、「性別越境」に対する受容性・寛容性が増大するようになる。筆者はこのような事態を、「多様性言説」の一般化という事態として把握する。またこの事態に伴うように、当事者たちの中に、次第に、どちらの性別にも明確には同一化できない性別に対する曖昧性を含んだ自己像を、自らの自己像とする人々が増えたことを、筆者は様々なデータから明らかにしていく。そして、このような自己像を、「独自化する自己像」と名付ける。

その上で筆者は、このような「独自化する自己像」を持つ当事者たちの自己意識を、安定性を欠き常に変化し続けているという点等から、ポストモダン論によって解釈可能であると規定する。「独自化する自己像」は、「性の多様性を認めよ」という当事者たちの主張が社会に受け入れられることによって成立した。しかしまさにその「独自化する自己像」を持つ当事者たちは、ポストモダンの自己と同じように、「独自化する自己像」であるがゆえに、性別越境を「自己責任として引き受けていく孤立化せざるをえない」自己でもある。「性同一性障害」当事者の自己像の変遷は、まさに現代社会に生きる我々の自己像のありようを、より明確に明らかにしていると、筆者は位置付ける。

2、論文の構成

はじめに

一章 性別越境概念とその社会的意味づけ

- 1 現在国内で流通する性別越境概念
- 2 性別越境についての国際的な動向と歴史
- 3 日本における性別越境概念の変遷について

二章 カテゴリーとのずれを含む自己像

——性別に違和感を覚える人々の語りを事例として——

- 1 はじめに
- 2 性別越境概念と当事者の自己像
- 3 調査の概要
- 4 3人の語りからみえてくるもの
- 5 考察
- 6 おわりに

三章 医療言説におけるゆらぐジェンダー概念と再帰的自己

- 1 はじめに
- 2 新しい性別越境概念の登場と批判の検討
- 3 ポストモダンにおけるアイデンティティ・身体・リスク
- 4 「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」の分析
- 5 ガイドラインの変遷に現れていること
- 6 おわりに

四章 「性同一性障害者」の自己提示の変容

——当事者団体代表者への聞き取り調査から——

- 1 はじめに
- 2 性同一性障害当事者運動の現況と自己像の変遷
- 3 分析方法・対象について
- 4 多様化する当事者像と非当事者の関係性
- 5、おわりに

五章 トランスジェンダーの性に関する意識はどう変遷したか

——当事者演劇団体の台本分析を通じて——

- 1 はじめに

- 2 分析対象と方法
- 3 TP の性に関する意識はどのように変遷したか
- 4 全体の考察と結語

第六章 トランスジェンダーの親の当事者理解と関係性構築に関する考察

- 1 はじめに
- 2 調査内容及び対象者について
- 3 子の受容と多様性言説
- 4 おわりに
- 5 本稿の限界と社会的提言

第七章 多様性言説とポストモダニティ

- 1 はじめに
- 2 脱真理化する性
- 3 新たな性の作用と多様性言説
- 4 多様性言説の議論の水準

おわりに

3、各章の要約

1 章：性別越境概念とその社会的意味づけ

今日的な国内の性別越境概念がいかにして構築されたかについて、その歴史的背景を把握した。19 世紀以降の西洋社会、主にアメリカの医療言説の動向なども含めて、異性装や、性別越境概念の変遷について整理した。また、国内についても、近代以前の性別越境概念のあり方、西洋的な価値観が生じた後の歴史を概観しながら、主に 1990 年代以降に起こった「性同一性障害」概念の登場に焦点を当てて、医療言説が構築されるまでの様子をまとめた。

2 章：カテゴリーとのずれを含む自己像

トランスジェンダーの人々の曖昧な自己像について、3 名の性別に違和感を覚える対象者へのインタビューデータをもとに考察を行った。この章では、当事者たちの二元論的でない自己像について、これを「アクチュアル・アイデンティティ」と定義し、その特徴や社会学的な意味について整理した。これは、個々人が社会的表象とのずれのなかに構築される再帰的な自己像であり、独自で唯一のものとして、個々人に認識されている。また、こ

うした独自性の追及は、身体についても指摘できた。

3 章：医療言説におけるゆらぐジェンダー概念と再帰的自己

国内における医療言説の変遷について考察した。性別越境者の治療方針として、国内で最も権威をもつ、日本精神神経学会の「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン」に注目し、それぞれの版の改定後に、ジェンダー、あるいは性別越境概念がどのように定義され、扱われるようになっているかを把握する。版を重ねるにつれて、ジェンダーがより多様で選択的なものと定義されるようになり、それと同時に、選択の自己責任化が起こっていることを指摘した。

4 章：「性同一性障害者」の自己提示の変容

ある国内当事者団体の活動に焦点を当て、それが、どのように変化していったのか、及び、その理由について明らかにした。この団体の活動は、はじめは、「性同一性障害」についての社会への啓蒙であったが、調査時点では、当事者個人を支援する活動へと変わっていた。かれらの活動にとって、性同一性障害という集団的な表象はより重要性を失い、カテゴリーを脱構築するようなコミュニケーションのあり方が求められたり、また、非当事者との関係性において、個人の能力や自己責任化が重要化していた。

5 章：トランスジェンダーの性に関する意識はどう変遷したか

トランスジェンダーを題材にした演劇団体の台本の分析を行った。2000年から、2011年までに上演された、この団体の本公演の台本全てを分析し、時間を追う毎に主人公像の描かれ方や、テーマがどのように変遷しているかを考察した。当初は、二元論的なジェンダー観を有する登場人物たちが描かれ、「性同一性障害」の理解と受容を求めているが、後期の作品では、登場人物のジェンダーは多様化、曖昧化し、「痛みの共同体¹」とでもいうべき、当事者と非当事者は何がしかの生きづらさを抱える互いに対等な存在として描かれ、当事者の側からのより深い他者理解が求められるようになっていた。

6 章：トランスジェンダーの親の当事者理解と関係性構築に関する考察

12名のトランスジェンダーの子をもつ親を対象に行った調査の結果について記述した。子の受容過程と、親のジェンダー・アイデンティティへの影響を考察した。受容のためには、しばしば親の環境の再編成が求められ、また、多様性を尊重する価値観を内面化するなかで、親自身のジェンダー・アイデンティティも多様なものとして認知されていた。また、子の受け入れには男女差があり、多様な性の価値観を受け入れるのは主に女性であった。

7章 多様性言説とポストモダニティ

ポストモダニティ論と接合しながら、性別越境概念の現代の特徴が、近代的なジェンダー観や人々の自己像に与えている影響について社会学の見地から理論化を試みた。フーコーが描いた近代的な性のあり方と、現代のそれとは何が異なるのかに関して考察を行い、また、1章から6章までに得られた知見を総合し、現代的な性の特徴について描きだした。性の脱構築は、戦略的に行われるものから、自律的にそうならざるを得ないものとして変化し、人々の性に関する自己像は、より再帰的かつ曖昧で複雑なものとなっている。

審査結果

本論文は、筆者が長年行ってきた「性同一性障害」当事者や当事者が作る諸団体、当事者の家族等に対するインタビュー調査をデータとしている。他の様々なマイノリティと同じく、「性同一性障害」当事者に対する調査は、被調査者との信頼関係なくしては行えない調査である。筆者は、学部時代や修士時代から培ってきた当事者団体との信頼関係に基づいて、貴重な調査結果を得ており、その点において、まず高い学術的意義がある。特に、「性同一性障害」当事者の家族に対するインタビュー調査は、非常に貴重であり、両親特に母親の苦しみや受容過程等、今後の支援施策にも資することが出来る重要な知見を含んでいる。

そうした貴重なデータの上に、筆者は、「性同一性障害」に関する先行研究では指摘されていない、自己像の近年の変化に焦点を当て、その背景と影響を描き出した点において、傑出している。確かに先行研究では、FTXやMTX等、移行する性別が明確でない当事者の存在は指摘されていたが、彼らの自己像を、「多様性言説」との関連性において把握し、ポストモダニティ論に位置付けたのは、筆者オリジナルな見解である。またポストモダニティ論その他の社会理論の理解も的確であり、論証も適切である。

特に本論文は、従来「性同一性障害」当事者運動に寄り添う形で、当事者たちの主張をなぞるような知見を出しがちだった先行研究と異なり、研究者視点に立ち、「多様性言説」のパラドックスとも言い得るようなポストモダンの自己の問題を示唆している点において、他の類似論文とは大きく異なっており、筆者の洞察力には高い評価を与えられるべきである。口頭試問においては、「独自の自己像」を持つ当事者たちの苦しみや、社会運動の課題等について、より積極的な提言があってもよかったのではないかということ等が指摘されたが、対象や知見に対して性急な評価を行うことなく、記述に徹した姿勢は、筆者の今後の研究者としての大成を期待させるものであるという点では、評価が一致した。またこのようなやりとりを通じて、審査委員は、筆者の学識と研究者姿勢が、非常に優れたものであることを確認した。

以上の評価に基づき、審査員一同一致して、石井由香理に、博士（社会学）の学位を授与することが適当であると判断した。